1964 年新潟地震による庄内地方の被害

－鶴岡市と酒田市で刊行された報告書－*

秋田大学地域防災減災総合研究センター　水田　敏彦
北海道大学　鏡味　洋史

1. はじめに

1964 年（昭和 39 年）新潟地震は新潟県沖で発生した M7.5 の地震であり，被害は新潟県を中心として隣県の山形県や福島県などにおよんでいる。筆者らは新潟地震の新潟県以外で発生した広域の被害全般について文献調査を通じて被害の実態を明らかにしてきた[例えば1)]。また，庄内地方について地方新聞の記事を収集し被害状況を整理した[2)]。この地震は新潟地震と命名されているが，山形県庄内地方は新潟に次ぐ被害に見舞われており，特に鶴岡市や酒田市では詳細な被害報告がなされている[3), 4)]。本論では，鶴岡市と酒田市で刊行された報告書に着目し文献調査を行い，両報告書を比較し被害の詳細を追う。

2. 庄内地方の被害の概要

1964 年新潟地震における庄内地方の被害は気象庁技術報告[5)]に山形県の市町村別被害一覧表が掲げられており，庄内地方のみ選び簡略化して表 1 に示す。被害は鶴岡市が最も多く死者 6，負傷者 36，住家全壊 298 等となっている。酒田市の被害は死者 1，負傷者 19，住家全壊 116 等であった。また，図 1 は震度分布図である。日本被害地震総覧[6)]による等震度線（VI, V）と庄内地方の当時の市町村を併せて示している。庄内地方については全域が震度 V の範囲に位置する。なお，鶴岡の震度VIは当時の委託観測点で日本被害地震総覧[6)]に掲載の等震度線はこれを基にしているが，気象庁震度データベース[7)]では鶴岡の震度VIは採用されていない。

表 1　1964 年新潟地震による庄内地方の被害

旧市町	死	傷	住家 全壊	住家 半壊	住家 床上浸水	住家 床下浸水	住家 一部破損	道路被害	鉄軌道被害	現在
余目町				7			1306	1		庄内町
酒田市	1	19	116	230	16	23	8428	116	1	酒田市
遊佐町			36	57			2093	8	1	遊佐町
鶴岡市	6	36	298	696			14689	13	3	鶴岡市
温海町	2	12	26	178			1055	6	5	
計	9	67	476	1168	16	23	27571	144	10	

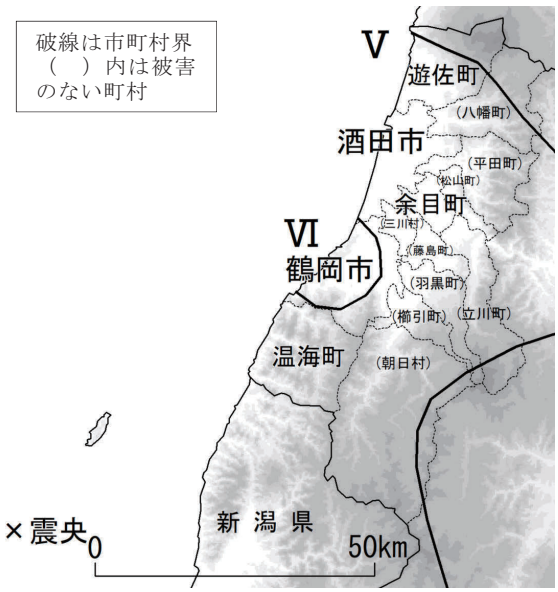

図 1　1964 年新潟地震の震度分布

*A Study of earthquake damage in Shonai district caused by the 1964 Niigata Earthquake
－Reports published in Tsuruoka and Sakata cities－ by Toshihiko Mizuta and Hiroshi Kagami

3. 鶴岡市と酒田市の比較と市域の変遷

鶴岡市と酒田市は共に山形県の庄内地方を代表する街である。両都市を比較し表２に示す。また，鶴岡・酒田市域の変遷を図２に示す。

鶴岡市は 1924 年（大正 3 年）鶴岡町が市制施行により鶴岡市となり，その後，1953 年（昭和 28 年）町村合併促進法の施行を経て，京田村，栄村，大泉村，湯田川村，田川村，豊浦村，上郷村，加茂町，大山町を合併し新潟地震当時，人口は約 9 万 6 千人（※1965 年国勢調査による），面積は 234km^2 であった。さらに，平成の大合併により 2005 年（平成 17 年）鶴岡市，藤島町，羽黒町，櫛引町，朝日村，温海町が新設合併して，2024 年現在の人口は約 11 万 7 千人で山形県では 2 番目，面積は 1,312 km^2 となり東北では一番広い市となっている。

酒田市は 1933 年（昭和 8 年）酒田町が市制施行により酒田市となり，1963 年（昭和 38 年）までに飛鳥村，西荒瀬村，東平田村，北平田村，中平田村，上田村，本楯村，南遊佐村を合併し，地震当時の人口は約 9 万 6 千人（※1965 年国勢調査による），面積は 171km^2 であった。また，酒田測候所が 1937 年（昭和 12 年）に開設されていた。さらに平成の合併により八幡町，松山町，平田町を新設合併し，2024 年現在の人口は約 9 万 5 千人，面積は 602 km^2 となっている。

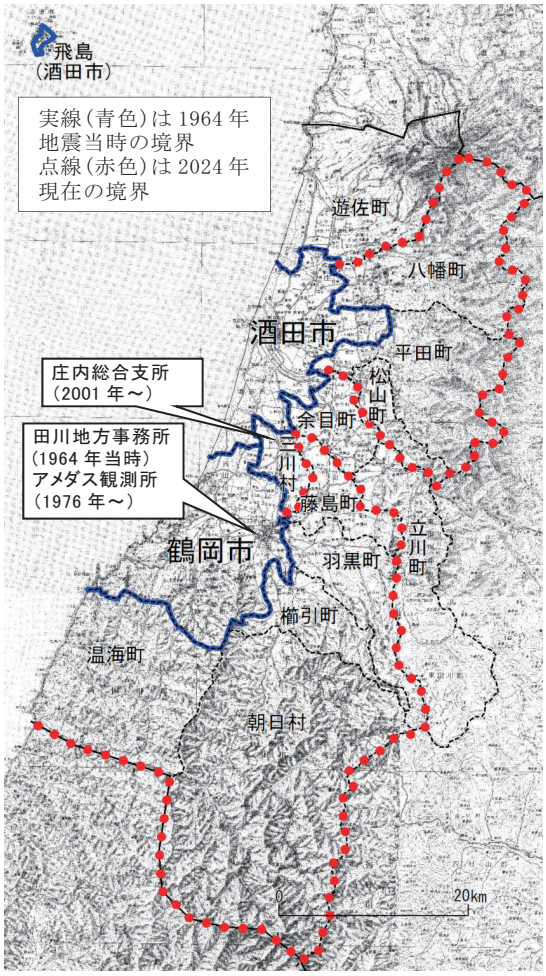

図２　鶴岡・酒田市域の変遷
（背景地図は 1962 年発行 1/20 万地勢図）

表２　鶴岡市と酒田市の比較

項目	鶴岡市［備考］	酒田市［備考］
市制施行	1925 年（大正 13 年）	1933 年（昭和 8 年）
人口（1965 年）	95,615 人	95,982 人
地震前の合併	京田村、栄村、大泉村、湯田川村、田川村、豊浦村、上郷村、加茂町（1955 年）、大山町（1963 年）［面積 234km^2］	飛鳥村（1950 年）、西荒瀬村、東平田村、北平田村、中平田村、上田村、本楯村、南遊佐村（1954 年）［面積 171km^2］
地震後の合併	藤島町、羽黒町、櫛引町、朝日村、温海町（2005 年）［面積 1,312 km^2、2024 年人口約 11 万 7 千人］	八幡町、松山町、平田町（2005 年）［面積 602 km^2、2024 年人口約 9 万 5 千人］
県出先機関（1964 年）	田川地方事務所［馬場町］	飽海地方事務所［秋田町］
同現在（2024 年）	庄内総合支庁［三川町］	
測候所	アメダス観測所（1976 年～）	酒田測候所（1937 年～2009 年）
図書館	鶴岡市立図書館	酒田市立図書館　光丘文庫
新聞 荘内日報（1946 年～） 山形新聞（1876 年～）	 本社 支社	 支社 支社

4. 鶴岡市と酒田市で刊行された報告書

1964 年新潟地震に関する庄内地方における行政の報告として，鶴岡市がまとめた『新潟地震の記録（鶴岡市を中心として)』[3] と酒田市がまとめた『新潟地震酒田市災害記録』[4] がある。図３と図４に表紙と本文の例を示す。また，鶴岡市と酒田市で刊行された報告書を比較し表３に示す。

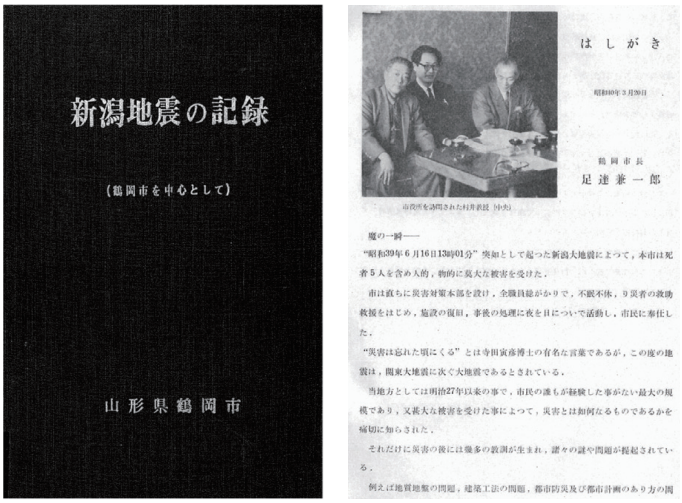

図３　新潟地震の記録（左:表紙 右:本文の例）

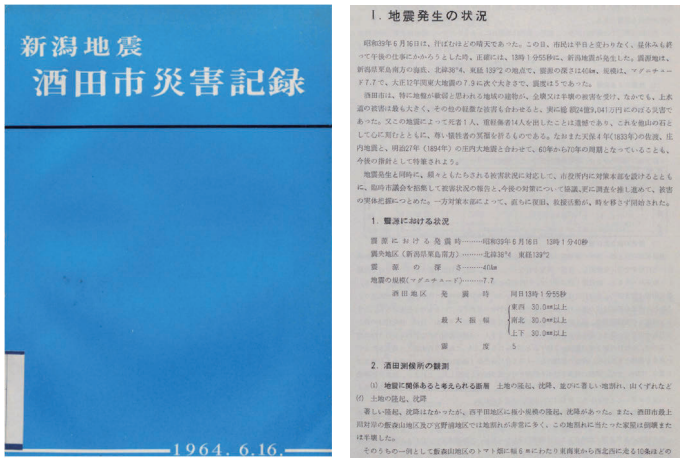

図４　新潟地震酒田市災害記録
（左:表紙 右:本文の例）

鶴岡市の報告[3] は鶴岡市新潟地震災害対策本部が編集し地震発生翌年の 1965 年 3 月に刊行されている。本書は本文 3 編とはしがき・付録・あとがきの計 176 頁よりなる。鶴岡市長による「はしがき」によると,「このたびの地震は関東大震災に次ぐ大地震である」「当地方としては明治 27 年（※1894 年庄内地震）以来の事」とし,「今回の震災を今後に対する教訓として反省しながら，その問題点をとえりあげようと試みたものである」とあり，本書の刊行の経緯が述べられている。第 1 編「地震発生の状況と被害及びその対策」では地震発生の状況，被害の実態，対策と復旧の状況がまとめられている。地震を感じた人々の 19 名の体験記が掲載されており第 5 章で述べる。第 2 編「地震の解明と分析」では日本及びその附近の地震活動の概況や庄内地域付近に起こった地震，新潟地震の地質学的考察など，第 3 編では「問題点と今後の課題」がまとまられている。鶴岡市は酒田測候所の資料を用いずに気象庁の資料を使用し，東京大学地震研究所の村井勇教授に校閲を依頼している。

酒田市の報告[4] は酒田市総務課が編集し地震発生から 2 年後の 1966 年 3 月に刊行されている。本書は本文 2 編とはしがき・記録写真・付録・あとがきの計 76 頁よりなる。酒田市長による「はしがき」によると,「地震のように多角的な被害をもたらすものについては，できるだけ詳細な記録が欲しい」とし,「過去の記録を参考にして，被害の拡大を防ぐ（中略）今後の指針ともなれば」と述べられている。第 1 編「地震発生と被害復旧状況」では地震の発生状況と被害の実態と復旧が詳細にまとめられている。酒田市は測候所があり酒田測候所の記録を用いている。第 2 編「地震の印象と記録」では地震を感じた人々の 8 名の体験記が掲載されており第 5 章で述べる。

表３　鶴岡市と酒田市の報告書の比較

項目	鶴岡市	酒田市
書名	新潟地震の記録（鶴岡市を中心として）	新潟地震酒田市災害記録
発行年月日，頁数	1965 年 3 月 20 日，176 頁	1966 年 3 月 1 日，76 頁
編集・発行者	鶴岡市新潟地震災害対策本部・鶴岡市長	酒田市総務課・小山孫次郎（※酒田市長）
はじめに	足立市長：明治 27 年以来の地震，将来の資料，元中学校長高橋氏に委嘱	小山市長：できるだけ詳細な記録，今後の指針
あとがき	鶴岡市新潟地震災害対策本部嘱託高橋静夫：鶴岡市を中心とした地震記録の蒐集・編集，東大地震研村井勇教授の校閲	資料は膨大で一部を削除，酒田市の災害の数的なまとめと写真記録・作文を掲載
地震の発生状況	気象庁の資料	酒田測候所の資料
被害実態と復旧	84 頁，12 地区別被害統計表	59 頁，13 地区別被害統計表
体験記	19 名（粟島 2, 温海温泉 1, 鼠ヶ関 1, 飛島 1, 鶴岡消防本部望楼見張番 1, 酒田測候所検測係 1, 大山小児童 3, 西郷小児童 4, 西郷中生徒 3, 西郷小校長 1, 大山小校長 1）	8 名（浜中小学校長 1, 第二中学校長 1, 西平田小児童 1, 第三中生徒 1, 宮野浦 2, とびしま船長 1, 第三中付近母子寮 1）
被害地図	5 万分 1 地形図：2 枚（土木・農林関係被害図, 住家・非住家の全潰・半潰分布図）	市域全図：9 枚（住家・非住家, 社会福祉・衛生施設, 農業, 土木, 小中学校, 社会教育施設, 水道, 港湾, 河川）
その他	地震の解明と分析：49 頁 問題点と今後の課題：14 頁	

5. 地震体験記から読み解く庄内地方での新潟地震

鶴岡市と酒田市の報告書[3), 4)]には被害の状況や人的被害の惨状を詳細に記載した計 27 名の体験記が収録されており, 断片的ながら学術論文や他の報告書に見られない内容を含んでいる。本論では収録されている新潟地震の体験記に着目し内容を紹介する。

鶴岡市で刊行された報告書[3)]については，第 1 編 1 章 3 節に「地震を感じた人々の印象」として，表題が付けられ，小中学生には学校名・学年・氏名が記載され，以下に示す 19 名の体験記がある。体験者は丸数字で区別して示す。

(1)①粟島釜谷において
(2)②粟島内浦において
(3)③温海温泉について
(4)④鼠ヶ関に於いて
(5)⑤飛島の潜水夫の話
(6)⑥鶴岡消防本部望楼見張当番の話
(7)⑦酒田測候所検測係の話
(8)学童の作文から
⑧おそろしかった地震(大山小 1 年)　⑨地震(大山小 5 年)
⑩新潟地震(大山小 6 年)　⑪じしん(西郷小 3 年)
⑫じしん(西郷小 4 年)　⑬おそろしかつたじしん(西郷小 5 年)
⑭新潟地震(西郷小 6 年)　⑮6 月 16 日の思い出(西郷中 1 年)
⑯恐ろしかった地震(西郷中 2 年)　⑰一瞬の出来事(西郷中 3 年)
(9)教師の記録から
⑱無題(西郷小校長)　⑲無題(大山小学校長)

酒田市で刊行された報告書[4]については第２編 １章に「地震の印象」として，３項目を挙げ，表題が付けられ，小中学生には学校名・学年・氏名が記載され，以下に示す８名の体験記がある。体験者は丸数字で区別して示す。

(1)教師の記録から

⑳港内に浅瀬(浜中小学校長)　㉑音を立てて落ちる棟瓦(第二中学校長)

(2)作文集から

㉒ふくれ上がる田圃(西平田小６年)　㉓軽くゆれる大地(第三中３年)

(3)地震の恐怖を語る

㉔次々におこる地割れ(宮野浦住民Ａ)㉕地盤が沈下(宮野浦住民Ｂ)

㉖スクリューに異変(とびしま船長)　㉗恐ろしさでいっぱい(第三中付近母子寮)

学校での体験記が多く，鶴岡市の報告[3]では 12/19 名(63%)，酒田市の報告[4]では 4/9 名(44%)で，種別は小学校長３名，中学校長１名，小学生８名，中学生の４名である。また，鶴岡市の報告[3]には①②新潟県粟島，温海町③温海温泉④鼠ヶ関，⑤酒田市飛島，⑦酒田測候所といった鶴岡市以外の記事が 6/19 名（32%）見られる。体験記を居場所ごとに整理して図５に示す。併せて主な内容を吹き出しで引用して示す。

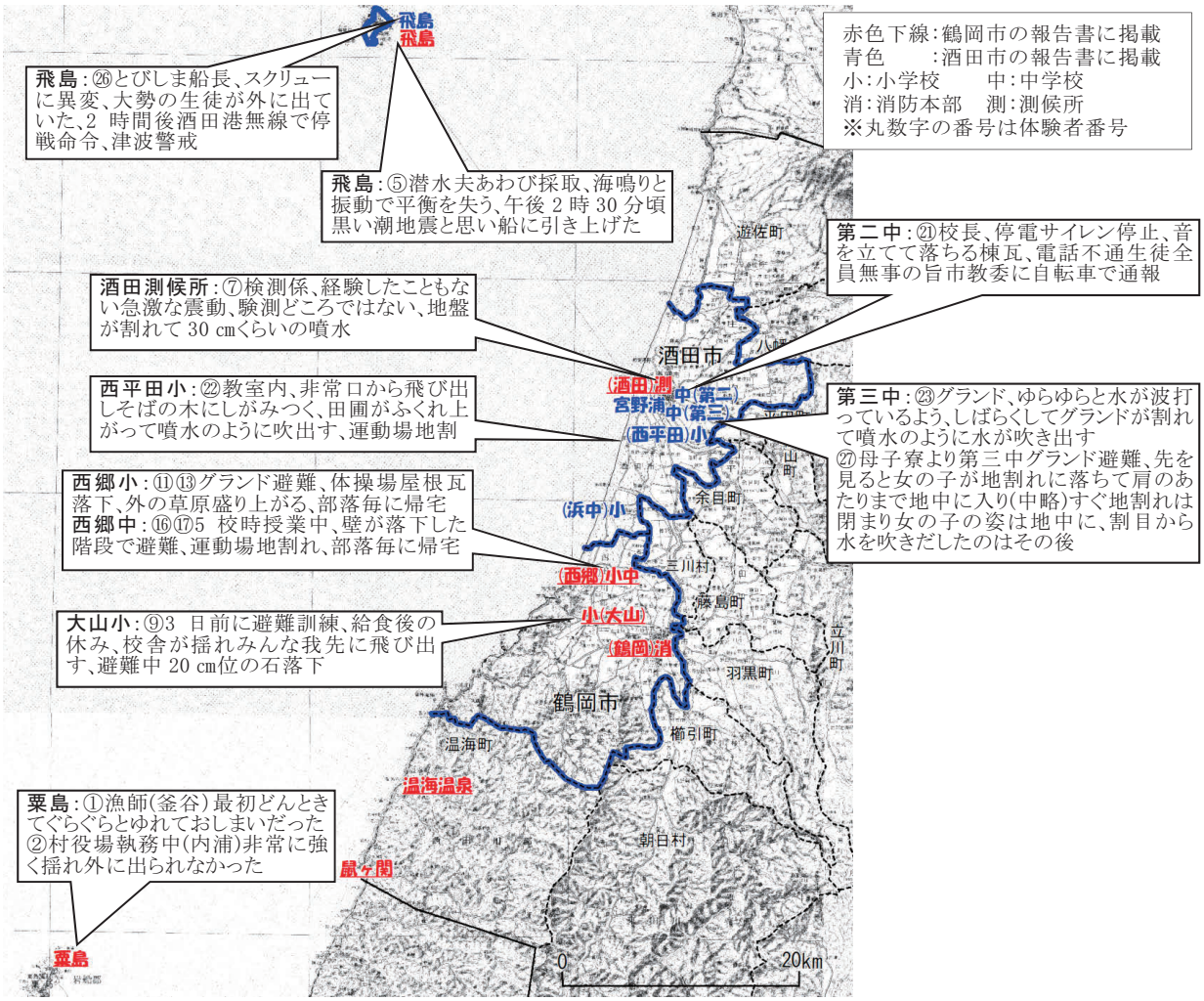

図５　鶴岡市と酒田市の報告書[3),4)]に掲載の体験記の例（背景地図は 1962 年発行 1/20 万地勢図）

6. まとめ

1964 年新潟地震に関して，鶴岡市と酒田市で刊行された報告書を紹介し比較した。庄内地方は新潟に次ぐ被害に見舞われ，直後の被害調査報告，学術論文には見られない体験記が多く残されている。江戸時代庄内地方は庄内藩で，その後，明治時代廃藩置県の過渡期（酒田県・鶴岡県）を経るといった強い地域性がある。隣接した都市で別々に刊行された詳細な報告書が残されている例は他に余りないと思われる。酒田市の地元の気象台資料に対して、鶴岡市ではこれを利用せず気象庁の資料を用いている。体験談では鶴岡市は市域に限定せず酒田市や他地域を含むなど広域を意識しているなど、各都市のこだわりを垣間見ることができた。両都市の歴史的背景を踏まえた比較論は今後の課題としたい。

参考文献

１）水田敏彦・鏡味洋史：1964 年新潟地震による新潟県以外の被害に関する広域的考察，日本建築学会技術報告集，28，69，pp.1072-1077，2022.

２）水田敏彦：1964 年新潟地震の庄内平野における被害に関する文献調査，日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道），pp.13-14，2022.

３）鶴岡市：新潟地震の記録（鶴岡市を中心として），176pp，1965.

４）酒田市：新潟地震酒田市災害記録，76pp，1966.

５）気象庁：昭和 39 年 6 月 16 日新潟地震調査報告，気象庁技術報告，43，230pp，1965.

６）宇佐美龍夫ほか 4 名：日本被害地震総覧，東京大学出版会，pp.394-400，2013.

７）気象庁震度データベース検索：https://www.data.jma.go.jp/svd/eqdb/data/shindo/index.html（2024.11.20 閲覧）